田畑での口のかけ合い

藤久　真菜

1．「昔ざっとあったとさじいとばあとがそろったとさ」

現在、二月十一日の夜に行われる板橋徳丸の田遊び（東京都板橋区徳丸、北野神社にて）は、「昔 ざっと あったとさ じいとばあとがそろったとさ」[1]という「唱えことば」を田草とりの段にふくむ。よねぼうや太郎次、やすめらが群がる人々の間をねり歩くひとにぎわいののち、ふたたびモガリと呼ばれる舞台に中心をうつしての段である。太郎次やすめの連れ合うさまが、爺と婆とがそろって出てくるムカシの始まりを連想させるのだろうか。「昔ざっとあったとさ」という言い回しがふいにのぼってくる。田遊びとムカシが互いに呼びこみ合いながら、いまに至っていることをうかがえ、興味深い。けれども、私の目にした限り、田遊び研究の側からは「爺と婆についての得体の知れないことば」[2]「歌意は下赤塚のとあわせてみてもわかりかねる」[3]と、なかなかムカシへ連絡していかない。

いま、徳丸の田遊びに参加をする人たちにとって、「昔ざっとあったとさ」がムカシの始まりとして思いおこされるのかどうかはわからない。しかし、田遊びもムカシもひろく私たちの言語行為の実践ととらえるならば、どこかで連想がはたらいて、語り始めが田遊ぶ人たちの口にふとのぼってくる、そのような過程を経てきたのだとしても、不思議ではない。ムカシも田遊びもわたり合って生きられる言語活動を探るこころみに、本稿から取り組み始めたい。

2．糸口―口、田畑、かけ合い

二〇〇〇年八月二十一日、二〇〇一年八月二十三日、二〇〇二年七月二十五日と、福島県岩瀬郡天栄村湯本で星絹江さん（一九二二（大正十一）年生）から、鳥をのみこむじさまのムカシ[4]を聴いている。ムカシは、やち（畑）でのじさまと雀との

出会いに始まる。二〇〇〇年八月二十一日（月）の聴き書き資料[5]を以下に掲げる。

あったぁど ☆あったなって ☆じさまがあの、うち、その、後ろにやち、やちっての、畑（はだけ）☆やちで ☆あー畑（はだけ）うないしてたら ☆雀が来て、鍬の上にとまって ☆じんがまぁめ、せんつぶまいて、ひとつぶなぁれって《笑いながら》《☆笑い声》じいがまぁめ、せんつぶまいて、ひとつぶなれってゆった ☆じさま ☆ひとつぶまいてせんつ、ぶなれってゆうたのになんだこの、っていってね ☆つかまえてのんじまったら ☆そのへそが ☆とこに ☆あの毛が三本はえたから、それ ☆引っぱったら ☆あ、ちんちんかむかむ《笑いながら》ひょーつくひょーつくってにゃあただって ☆でまた引っぱったら、こん、また、それまた少し、いい声で、《より高い声で》ちんちんかむかむひょーつくひょーつく《皆の笑い声》ってゆったってゆうんだよ。で、こ、それまた、《より高い声で》ちんちんかむかむひょーつくひょーつくって ☆いや、じいさんこれはいいことになった、こんだなああの、飴やたいこ買ってなほうして ☆うたうたって ☆ほうして、そこ引っぱって、囃しにして ☆えお金持ちになったと ☆そういうことをね、ゆ、###☆むずし、小さいのには、そんなことうちも、つくっただがるんだ、知らねえけっど《☆笑い声》

（聴き手：飯倉義之・高木史人☆・竹内邦孔・野村典彦・藤久真菜）

じさまの鍬の上にとまって、雀が「じんがまぁめ、せんつぶまいて、ひとつぶなぁれ」「じいがまぁめ、せんつぶまいて、ひとつぶなれ」[6]と「ゆった」。星さんやまわりから笑いがこぼれるところだが、じさまは笑うどころではない。「ひとつぶまいてせんつ、ぶなれってゆうたのになんだこの」と雀をつかまえてのんじまう。

お互いに「ゆうた」り「ゆった」りして、じさまと雀がやち（畑）で相たいする。昔話集をひらくと、爺婆と鳥や狸、猿、狐たちとが田畑でかわすやりとりがにぎやかに目に飛びこむ。

【1】高崎秋見さん「鳥呑み爺」（鹿児島）

畑を打っちょったら、きれいな鳥が飛んできたち。鳥がね、お爺さんの畑を打つところの隣の山に来て、お爺さんの畑を打っちゃっとこころを見ちょって、

「おんじょ（老爺）が、畑を打ちゃ、左で打ってん、ぎいーぎいー」ちゅっせぇ、そいが叫（おら）んだち。ま、一ぺん追うたたっち。また（鳥が）来て、そげん言たたっち。何度追うてもそうして来おったたっち。そしたあ、お爺さんが腹をたてて、ずっと追いかけていって、そしてそん鳥をば殺してやろうと思って、ずっと追いかけていって、そん鳥を殺して、そして、

「お婆さん、お婆さん。今日、俺が畑に行っちょったら、こん鳥の奴が俺の悪口ばっかい言うた。そいでもう、そん殺したからな、これをお爺さんとお婆さんと二人で食べる」ち言って、お婆さんと二人食もったたっち。…《以下つづく》

【2】山内俊雄さん「狸の失敗」（宮城）

むがす、むがす、あっとごぬ、おずんつぁんど、おばんつぁんが、えだんだど。

あるしのごど、おずんつぁんが、はだげさえって、

へしと粒（一粒）の豆コァ、しェん粒（千粒）ぬなれ

二粒の豆コァ、ぬしェん粒（二千粒）ぬなれ

どゥでえ（歌い）ながら、豆蒔じすてだんだど。ほすたっけェ、

へしと粒の豆コァ、しと粒ぬなれ

二粒の豆コァ、二粒ぬなれ

ど囃すものが、あんだ（あるんだ）ど。ほんで、だんだべェ、ど思って見回すたっけェ、古ムズナ（古狸）が、クハヌジ（桑の木）の上がら、囃すてだんだど。おずんつぁんは、ムズナが、すんだ（死んだ）、すんだどいうど、すんだ真似コするっつごどば（ということを）ちいでだんで、

「あッ、ムズナが、すんだ、すんだ」

ど、ゆったんだど。ほすたっけェ、やっぱす、ムズナが、すんだ真似コすて、ドサッと落ずでちたんだど。ほんで、おずんつぁんは、こえずァ、うまぐえった、ど思って、大ええそぎで（大急ぎで）、ムズナのてあす（手足）ゆつけだ（結わえ付けた）んだど。ほすて、ウンツジ、ウンツジ（ドッコイショ、ドッコイショと）しょって、けえったんだど。ほれがら、おばんつぁんど二人すて、ムズナずる（狸汁）すて食ったんだど。こんで、えんつこ、もんつこ、さげだ。

【3】横路のせさん「勝々山」（鹿児島・甑島）

あるところれえなあ、爺と婆とおって、そって、その、田打ちけえ、爺さんが行たて、したとこいが、その大きなたまの太か爺さんで、田打つたんびに、左の方に行たて、ブラ〳〵、右の方にいたて、ブラ〳〵するもんやっでえ、狸が、その、

「あの爺の田打つちんちょう見れ、左がっかい、がっかい。右がっかい、がっかい」つう、囃子かけてくれたとてなあ、狸が。そしたれえ、

「よおし、わや、そげんいうて。口かなえ、おいが打っ殺えてくるっ」て、いうて、その何か投げた拍子に、その狸がまあ、死んだ真似してみせて、そして行たて、

「あゝ、狸が死んで臭さか」ていうたら、ほんにその狸が死んだごとしてみせて、爺が括ってきて、

「婆、婆、こらあ、今日は狸が口かのうてしたでえ、打ち殺れえて、きびってきたでえ、晩にゃあ狸の味噌汁やっ」

て、いうたいば…《以下つづく》

「叫(おら)んだ」（【1】）、「うでえ（歌い）ながら」「囃す」（【2】）、「囃子かけてくれた」（【3】）といった口（くちばし）を使っての行為が、畑や田で、爺や鳥、古ムズナ、狸たちからくり出される。

「悪口」（【1】）、「口かなえ」「口かのうて」（【3】）と口にまつわることばに目をとめて、昔話集からの文字資料をもう少し追ってみる。池田久喜さんの「かちかち山」（熊本【4】）では、爺さんが「今日はいっちょ見ちょれ、猿が、口のうそばかり言うちょるけん」ともらす。関勝麿さんの「かちかち山」（山形【5】）では、「ほごさ狸が来て、「ばんば播いた豆くっされろ、ずさま播いだ豆、虫けー」て、悪口しったど」。「今度狐来て今度、木の根っコさこげで、「んー、じっちゃ、じっちゃ、一粒まげば一粒やー、二粒まげば二粒やー」て言ったば今度、「この畜生！辛口きぐ！」って、追(ほ)って行った」のは、池内スヱさんの「婆汁」（秋田【6】）のじっちゃである。高橋アサエさんの「勝々山」（新潟【7】）では、「また狸がチョコ〳〵チョコンと出てきて、「粟一粒、一粒なれ、粟一粒、一粒なれ。」って口ごたえする」。

爺たちも、「一粒の豆、千粒になあれ」と「口に出して」（池田ミヨエさん「勝々山」（山形【8】））豆を蒔き、「ゆった」り「うでえ（歌い）ながら」、田畑に身を向かわせる。そこへやって来る猿や狸、狐たちは、「口のうそ」「悪口」「辛口」「口ごたえ」と爺婆を相手に口を存分にはたらかせる。東北、西南に分けての地域差[7]や一致[8]をしばしば指摘されてきたくだりであるが、口の活動は、東西の区分けにとらわれずあらわれる。口を活用しての言語行為、しわざを、本論考では口のわざ[9]と名づけ、爺婆と鳥や狸、猿、狐たちとのやりとりを、田畑での口のわざのかわし合い、口のかけ合いとしてとらえるところから出発する[10]。

3．口のわざ

①見つける、聴きつける

資料【3】で、狸のかけてくれる「囃子」は「あの爺の田打つちんちょう(おちんちん)見れ、左がっかい(ひだい)、がっかい。右がっかい(みーざ)、がっかい」と、「見れ」という呼びかけをふくむ。呼びかけに誰かが応じてくることはなくても、見ろ見ろと爺のかたわらで囃し立てる。

副島セキさんの「猿の婆汁」（佐賀【9】）の猿どんは「あの爺が田打つにゃ、見ーろ見ろ。左ぎいにゃ、ベッチャイショウ。右打つぎにゃ、ヨーロヨロ」と、小川つるさんの「勝々山」（鹿児島・甑島【10】）では、狸は「あの爺が、ようそみれ(所作見れ)、左鍬(ふだいげえ)にゃあ、がっかいせえ、右鍬(げえ)にゃあ、がっかいせえ」と言う。荒木きみえさんの「木舟土舟(きぶねどぶね)」（兵庫【11】）では、狐が「あの爺のかずきざま見ちゃれ。めんどい(ぶさいくな姿じゃ)ふうじゃ」と「笑うた」らしく、江藤力蔵さんの「かちかち山」（熊本【12】）の狸は「爺が田打つざま見れ、左ぐわ(左側)にゃ、右ぐわ(右側)にゃ、左ぐわにゃがっかりしょ、

右ぐわにゃよろりんしょ」と「何辺も言う」。

濱なつさんの「勝々山」（鹿児島・甑島【13】）の猿は、爺の「田打ちば見とって」、橋口満夫さんの「勝々山」（鹿児島・甑島【14】）のたのぎは、「爺さんが田打ちおいとう見て」いる。実際に爺の田打ちを目にした上で、「あの爺の田打見んかあ」「あの爺が田打ちみんぎゃ」と口をひらく。

鳥はお爺さんの畑打ちするところを「見ちょって」（【1】）、狸は「お爺さんの畑するの見てて」（山田アサイさん「勝々山」（新潟【15】））、お爺さんの畑打ちを「ちょこっと木の株に腰掛けて見よった」（手塚カタさん「カチカチ山」（佐賀【16】））。狐は「爺の豆まき見て」（木村喜三郎さん「茶釜に化けた狐」（秋田【17】））、猿は爺さまの豆蒔きを「ボッコさ腰かけて見わって」（横山オマツさん「猿聟入り」（秋田【18】））いる。菅野トミさんの「勝々山」（岩手【19】）では、お爺さまが山に「あらく掘り（開墾）」に行ったところ、「狸はそこにいつも出はって見てたもんだとす」。爺たちのそばへと来て、口をひらかぬうちから目をはたらかせ、爺が田畑や野を打ち、掘り、豆を蒔くのを腰かけてじっと見ている。爺の揺れる「ちんちょう」や「ようそ」「ざま」を目でとらえ、見ろ見ろと口をかけてくる。

はたらかせるのは、目だけではない。富樫イネさんの「狸むがし（勝々山）」（山形【20】）では、爺が「声調子のやんべだ（名調子）もん」で「唄う」、その「畑の声ば聞ぎづげで狸が来たな」。「一粒の木さ万粒なぁれ」という爺様の「その声聞いて」、「一粒の木さ十粒なれ」と言う狸（吉田吉治さん「カチカチ山」（福島【21】））や、「一つ蒔いたら千粒なれ」と蒔くと「どこだって聞きつけて」、あとから「一粒蒔いたら腐れ」とたたみかけるむじな（八藤後ナオエさん「狸の婆汁」（新潟【22】））もいる。

爺の声をどこからか聴きつける。どこからか姿を目にとめる。じっくりと見ているからこそ、田を打つ爺の身や「ちんちょう」の動きに合わせて、「拍子」（坂口実さん「狸と婆汁」（熊本【23】））や「囃子」をかけることができる。聴いているからこそ、「一口一口弥次」（佐藤亀蔵さん「豆まき爺」（山形【24】））ることもできる。口をひらくだけではなく、相手の姿や声を、見て、聴いている。身の一部として、目や耳をもはたらかせて、口のわざは生まれてくる。

②声をはり上げる

狸たちが何を聴きつけてやって来るのかといえば、爺たちの「畑の声」「その声」である。ここでは、田や畑でどのような声を発するのかということに注意をはらう。

資料【20】で、狸が「聞ぎづげ」たのは、爺が畑で「一粒千粒なれ」をくり返す声であり、「声調子のやんべだ（名調子）もん」で「唄う」、「うんと良え声」、「高調子」といったことばがとりまく。調子を高め、うんとよい声をはり上げて、豆を蒔く。とっておきの声で、爺は畑に向かっている。どんな声を田畑に向けるのか、富樫イネさんのムカシにおける爺の声を大事な手がか

りとしたい。

③真似をする

星絹江さんのムカシでは、じさまが「ひとつぶまいてせんつ、ぶなれ」と言ったのに、雀は「せんつぶまいて、ひとつぶなぁれ」と言った。資料【2】では、おずんつぁんが「しと粒（一粒）の豆コァ、しェん粒（千粒）ぬなれ／二粒の豆コァ、ぬしェん粒（二千粒）ぬなれ」と「うでえ（歌い）ながら」豆を蒔いていると、古ムズナが「しと粒の豆コァ、しと粒ぬなれ／二粒の豆コァ、二粒ぬなれ」と囃す。爺の口にする言い回しと、雀や古ムズナが口にするそれとは、互いに口調が似かよう。

【25】黒坂サダエさん「猿むがし」（山形）

むがし、むがし。

むがしあったけど。爺ど婆（ばんば）どいだった。爺はな、山（やんま）の畑さ粟播ぎに行った。「婆、婆。粟播ぎ蟬鳴ぐさげて、粟播ぐでは」てな。暑い山坂登って、暑いな我慢して粟播ぎよな。すっと、山がら猿ぁ出はて来て、爺の口真似だど。真似からして唄うどごだど。

〽一粒ぁ千粒なれ　一粒ぁ千粒なれ

て爺がいうと、猿は、

〽一粒豆は一粒　一粒豆は一粒

て。すっと、爺ぁあんまりやらすぐね。こわりすぐね小憎らしい（手に負えない）囂（やかま）すねくて、たげただねけどは。

猿あ石の上さ坐（ねま）てまだ口真似して唄うけど。

〽一粒豆は一粒　一粒豆は一粒

猿の「一粒豆は一粒」は、爺の「一粒ぁ千粒なれ」の「口真似」であり、猿は「真似からして唄う」「口真似して唄う」。高橋孝一さんの「かちかち山」（宮城【26】）では、じんつぁんが「一つ植えれば二つになれ、二つ植えれば三つになれ」と豆を蒔いていると、狸が「一つ植えれば腐（くーさ）れろ、二つ植えれば腐れろ」とじんつぁんの「口真似」をする。猿も狸も、爺の口から出てくる言い回しをしっかりと聴き取った上で、そこを活用しての「口真似」で返してくる。

資料【16】の狸は、お爺さんの田打ち（畑打ち）の最中に「真似しぎゃ来よったて」。爺が打つ間ずっと、「あの爺が田打つな、田打つな」「左（ひいだれ）が、左がなぁ、ギッカンショ」「右ぎゃなぁ、ギッカンショ」と言っている。資料【13】の猿は、爺の田打ちを「見とって」、「あの爺の田打（たあうち）見んかあ。左（あだい）ぎゃにゃぎゃっ、右ぎゃにゃぎゃっ」と口をひらく。その猿にたいし、爺は「ああいが（あれが）、ま、あん畜生、何処ん者（もん）か、おいが（おれの）真似して」と、自分の「真似」をしていると腹を立てる。爺のほうは何も口に出さず、田畑を打つ作業にいそしむ。その爺の動きをじっと見ている狸や猿は、田打ち、畑打ちの調子に合わせ、「棒振り上げち打たすとに拍子合わせて」（【23】）、口で拍子、囃しをかけて「真似」をする。

狸や猿、鳥たちは、爺の豆蒔きの声を聴きつけ、田畑打ちの身の動きを目につける。その上で、すかさず、口で「真似」をする。爺の口調や、所作の調子にのり合わせながら、狸たちは腰かけたまま、口を活発に動かしての「真似」を得意のわざとする。

④くり返す

資料【1】の鳥は、爺の畑打ちを見てはおらび、爺は追う。鳥は「何度追うてもそうして来おったたっち」。資料【12】の狸も、「何辺も言う」。何度も、何べんも、口でくり返す。

長谷部紀子さんの「一粒、千粒なあれ」（秋田【27】）では、むじなは木の根っこに腰かけて、「一粒の豆、一粒でけじゃあがれ（そのままで居あがれ）」と「毎日畑さ来て、口（くち）きく」。野田高徳さんの「爺と狸（狸汁型）」（佐賀【28】）の狸は、石に腰かけて「あの爺が、左ぎぃにゃあぎっかんしょ。右ぎぃにゃあぎっかんしょ」と「いつも言う」。狸は、木の根っこに腰かけて、爺が「畑に蒔くごとに一粒の豆一粒でくされれって、その悪口いう」（石川甚一さん「勝々山」（秋田【29】））。鶉は、向こうの山の木に腰かけて、「爺の唐鋤や、あっちを見ては（あっちを見ては）ちゃ見いちゃガッタン。こっちを見ては（こっちを見ては）ちゃ見いちゃガッタン」と言うが、それが「一ぺんじゃなし、二へんじゃなし」、「あんまり言う」（佐伯ヨシエさん「鳥呑爺」（長崎・対馬【30】））。小島頼雄さん「かちかち山」（熊本【31】）のお猿は、「爺が畑うちゃ　右側にぐわぐわ　左側にぐわぐわ　のちゃしりゃどっさり」を「何辺も繰り返して言う」。

毎日、いつもいつも、蒔くたびごとに、何度も、くり返して、口を出す。爺も負けじとどなり、追うが、彼らは「あいかわらず来て」（【28】）は、口をたたみかける。

4．実現を願う／打ち消す

爺たちと鳥や狸、猿たちとが出会う田畑では、さまざまな口の活動が飛びかっている。その一端を探るこころみにつづき、本節で、相手のわざをうけて、みずからの口のわざで返すというかけ合いのうちに、彼らのやりとりをたどり直してみたい。

鳥や狸、猿たちがやって来る前から、田畑にひとり身をおいて、口に何かを言い、うたいながら豆や種を蒔く爺たちがいる。

【32】新正惣吉さん「勝々山」（山形）

また、爺（じん）ちゃま、また、豆蒔きながら、
「爺（じん）じゃ豆、一本千本（いっぽせんぼ）なあれ、爺じゃ豆、一本千本なあれ」
って、蒔いっだら、また、猿来て、して、大っきい石の上さあがって、
「爺（じん）じゃ豆、一本一本（いっぽいっぽ）のまんまよ、キョッキョッキョッ」
って。あど、豆どこ持っていって、して、一粒蒔いで、十本も二十本もなればいいんども、
あど、
「一本（いっぽ）、一本（いっぽ）のまんまよ」

て、悪態つくから、

「この猿、にく猿、よーし、仕方ねぇ」

「爺じゃ豆、一本千本なあれ」と口に出して、爺は豆を蒔きつづける。千本にまでならなくとも、「一粒蒔いで、十本も二十本もなればいい」、それなのに「爺じゃ豆、一本一本のまんまよ」と悪態をつく猿は、「にく猿」となる。資料【19】では、爺は「俺は千粒取りてえと思って豆蒔いてんのさ」、だからこそ「一粒の豆は千粒になれ」と口に出して蒔く。池田鉄恵さんの「勝々山」(山形【33】)の爺さまは、「爺の豆　一本　千本なーれ」と豆をぽろぽろ蒔くが、「やっぱり気持はほんだ気持で植えなやの。一本な十本も二十本もなれっでしての」と、池田さんのことばが追いかけてつづく。

一粒蒔いて、十本にも二十本にも、千粒にもなってほしい。爺たちは実りを願って豆を蒔く。ひとつがふたつに、十に、二十に、千に、万に、数はいろいろだが、植えている一粒はいまよりも多く豊かにふえていく。そうなればよいと実現を願う「気持」につき動かされて口をひらき、願う「気持」を口にこめて一心にはき出す。

もう一度、資料【20】を思い出しておきたい。声をはり上げるという口のわざを実践する爺は、「うんと良え声」、「高調子」で「一粒千粒なれ」とうたいながら豆を蒔いていた。一粒が千粒にもなってほしい。実現を願って、なれ、と命じる。豆に向かってかけているのか、土に向かってかけているのか、願いがとどくように、とっておきの声をはり上げる。口のわざにみがきをかけて、また、せっせと身を動かして、口でも身でも実現を呼びよせようと、爺たちははたらきかける。

そこへ、狸や鳥たちがやって来る。

【34】小野タツさん「勝々山」(新潟)

お爺さんとお婆さんがあったとさ。お婆さんは家で米つきで、お爺さんは畑仕事、それで豆蒔きに行ったんですって。畑に□道作って、豆蒔く時は、

「一粒蒔いたら千粒なれ、一粒蒔いたら千粒なれ。」

って言って一生懸命働いたとさ。そしたら今度狸が来て、

「千粒蒔いたら一粒なれ。千粒蒔いたら一粒なれ。」

って言うんだとさ。

「さあ、この畜生、なんぼでも反対に言うすけ、今度、もち持って来る。」

一粒と千粒とを言いかえ、口調の上では似かよっているけれども、一粒が千粒になるのと、千粒が一粒になるのとでは、目ざすところは大違いである。まさに、狸は爺にたいして「なんぼでも反対に言う」。千粒はたった一粒に、一粒は一粒のまま、悪くすれば腐ってしまい、何も実りはもたらされない。鳥や狸、猿たちは、爺が口にするところを、あとからくり返し打ち消し

ていく。鳥や狸たちの姿勢に注意してみると、彼らは鍬の上にとまり、木の根っこやぼっこ（切り株）、石の上にどっかりと腰をおろしている。一緒に身を動かして田畑をうなってくれるわけでも、豆を蒔いてくれるわけでもない。口は活発でも、腰かけたままでは、農作業は停滞してしまう。

爺たちは実りを願って、その実現を引きよせるべく、口をひらき、手も足も動かす。爺の口や身のわざを目や耳でうける狸たちは、みずからの口の上でも、身の上でも、爺のはたらきかけとは「なんぼでも反対に」引っぱり返してくる。

「一粒　千粒なぁれ」と豆を蒔いていた爺がお昼の握り飯をひろげると、猿が山からおりて来る。ぼっこに腰かけて「やぁい爺　一粒は　一粒でけずかれ（一粒だあ）」と言い、追っても逃げない。何日か経って、豆を蒔いたあとを見に行ってみると、育っているどころか「草おがって、なんともならねぇ」というくだりが、大友きくさんの「猿婿」（秋田【35】）で冒頭に語られる。猿が「一粒は　一粒でけずかれ」と打ち消して口にしたから、「草おがって、なんともならねぇ」状態になったのかどうかはわからない。けれども、「猿、さる、んが（お前）、したごと言うおでねぇ、おれぁ〝一粒千粒〟て言うし、んがば〝一粒一粒ままでけぢがれ〟て言たら、豆ぁ生（お）がれねがろねぇ」（畠山子之吉さん「猿聟入　見るなの座敷複合（猿の嫁）」（秋田【36】））、「猿猿そんなこと言わねんだ」（石渡チヨさん「猿聟入り」（秋田【37】））、「猿、猿。そったこと言わねぇでけれてや」（小松キヨさん「猿聟入り」（秋田【38】））、「猿、猿、そったこと言わねえで」（【18】）と嘆願をする爺たちもいれば、「吾どごねな、娘三人あるはで、そのうじどれでもけるはで一粒千粒になあれて蒔（ま）いたら、一粒千粒になあれッていってけろ」（工藤さださん「猿の聟さま」（青森【39】））と「独言（ひとりごと）」を言う爺もいる。口に出すことで、実現を呼びよせようとする。実現の可能性があるからこそ、爺たちは「一粒千粒」を口に出し、そうなったら困るような状況へと口でひっくり返してくる鳥や狸、猿たちを追い払い、やめてくれと嘆願して、口封じにやっきになるのかもしれない。

爺婆と鳥や狸たちとが田畑で出会う。たいする相手は、爺婆にとってはやって来る鳥や狸たちであり、彼らにとっては爺婆が相手である。相手の口や身のわざをよく見て、聴いて、それを下じきに打ち消す。爺が口や身を使って実りを引きよせようとすると、鳥や狸たちは、それらを「なんぼでも反対に」返して、実りを遠ざける。爺はそれをさらにひっくり返し、鳥や狸の口のわざを無効にするべく、口と身とで相手に向かっていく。実現を願い、呼びよせようとする。打ち消す。そのくり返しをつづけるうちに、爺たちと鳥たちの間に、口のかけ合いが生まれてくる。

5．口のかけ合い―ムカシ、田遊び

爺と鳥や狸たちとの口のかけ合いを、実現を願う／打ち消すという部分だけでとらえきれるものなのか、資料を行き来しているとわからなくなる。

【40】西脇実之介さん「鳥食い婆」（奈良）

爺が山で鍬持って仕事しとったらなあ、雀が飛んできて、「爺やの鍬へとまれ、婆やの鍬へとまれ」というて笑うたて。

【41】安食フジさん「勝々山」（山形）

もっち塗った木の切株さべタッ、と座ってな、まだ気いつかねで

「爺、爺、一粒は一粒だべな。一粒は一粒でけづがれ、二粒は二粒でけづかれ！」

て、狸大騒ぎだけど。

雀は「笑う」、狸は「大騒ぎ」で口をかけてくる。「囃す」（【2】）、「囃子かけてくれた」（【3】）、「はやし立てた」（藤島浩さん「猿とばば汁」（熊本【42】））、「はやしたり」（菊地サカヱさん「かちかち山」（岩手【43】））と囃しをかける狸たちもいれば、「拍子合わせ」（【23】）る狸もいる。鳥や狸たちは、口をかけることでにぎやかに田畑へはいりこむ。相手を打ち消すばかりが口のかけ合いではなく、鳥たちは、囃したり、拍子を合わせたり、笑い、騒ぎ、田畑をわき立たせる口の持ち主でもある。

二〇〇二年三月十七日、午後六時をまわる頃、藤守の田遊び（静岡県志太郡大井川町藤守、大井八幡宮にて）が始まった。二十五番の「番組（わざおぎ）」のうち、「荒田」と「鳥追」では、少年（青年）たちが手をつないで円陣を組み、舞台の上をぐるぐるとまわる。ふいに、舞台の外から「まわれ」と誰かが口をひらく。すると、速度を上げて、まわり出す。[11] かかってくる声に合わせて、はやく、ゆっくりをくり返す。

二〇〇四年二月十一日、板橋徳丸の田遊びの夜、間に休憩をはさんでのち、先にふれたよねぼうや太郎次やすめが姿をあらわしたのは、七時を過ぎる頃だった。ひしめく人々の間をぬいぬい、左へ右へとよりながら、よねぼう持ちがモガリへ向かう。よねぼうは、「男性の性器が誇張されて」[12]いる、「裸身の男性単身像」[13]、「ワラ造りの男根に紙を張った人形」[14]としばしば説明される。その説明にかなっているのであろう、「こっちのお客さんは声援が少ないなあ、ほしいとか言ってもらわないと」とかけてくるはっぱに合わせて、まわりから笑いが起こり、手がのびて、声がかかる。[15] よねぼうへのびてくる手、かかる声は、つづいて登場する太郎次とやすめにも向かう。おなかのふくらんだやすめが立ち止まると、すかさず「破水しちゃったか」と口の手がはいり、ふくらみに手がのびる。なかなかモガリまで到達しない太郎次やすめに、「寒いからはやく来い」とモガリからお呼びがかかる。徳丸の一夜のうちでも大いにもり上がるひとときである。

爺と鳥や狸たちのように、お互いをひっくり返そうとする口のかけ合いが、そっくりそのまま田遊びにあてはまるわけではない。私が訪れた徳丸、下赤塚、藤守の田遊びの場合でも、「唱

えことば」を打ち消すような口のかけ合いはおこらなかった。それでも、「唱えことば」の合間合間に、舞台の仕切りをこえて、円陣の速度を上げたり、よねぼうたちを調子づかせる口がかかる。[16] 田遊びの夜は、口のかわし合いをはさみながら、深まっていく。さそう、こたえる、うながす、呼びよせる、わき立たせる。口と口とをかけ合うことで立つ波は、打ち消し、反対に引き合うだけではない。口のかけ合いという、私たちの言語活動のひとつのあり方を、田遊びとムカシをわたって示し出す。手探りを始めたこころみを、これからも育てていきたい。

注

(1) 二〇〇四年二月十一日の徳丸の夜、手にしていた私のノートには「昔ざっとあったとさじいとばあと…やすめたろぶたい上にいる」と走り書きがある。録音資料はないため、「唱えことば」については『いたばしの田遊び』(東京都板橋区教育委員会調査・編集、板橋の田遊び保存連合会(田中吉五郎・小泉重次郎)、一九七三年)を参照して、引用をした(三十二―三十三頁)。なお、下赤塚の田遊び、田草とりの段では「昔 昔候ヵところへ爺と婆と うらり候」(同書、四十五頁)という「唱えことば」になっている。

(2) 新井恒易「板橋の田遊びについて」(板橋区立郷土資料館編『板橋区立郷土資料館紀要 第二号』板橋区教育委員会、一九八三年、講演記録として掲載)、四十九頁。

(3) 新井恒易『農と田遊びの研究 上巻』明治書院、一九八一年、一二二頁。

(4) このムカシの題名をまだ星さんに確認していない。これまでは、「ちんちんかむかむひょーつくひょーつく」「みじかいムカシ」「じさまが鳥をのみこんだ話」といった呼び名が、私たちの間でのぼっている。

(5) 聴き書き資料についての凡例は次の通りである。

①聴き書き資料は、一九九九年八月、二〇〇〇年八月・十一月、二〇〇一年八月、二〇〇二年七月・八月・十一月、二〇〇三年七月とつみかさねてきている、福島県西白河郡大信村および同県岩瀬郡天栄村におけるフィールドワークにもとづいて、私が直接聴いて録音・翻字したものからの提示である。

②福島県での調査は、飯倉義之・高木史人・高塚さより・竹内邦孔・野村典彦諸氏の同行・協力のもとに行われている。

③翻字に際しては、語り、話の場に生きている音や声として、語り手／話し手／聴き手の相づち、笑い声、背後に聞こえる音についてもできる限り翻字につとめているが、作業は現在進行形で試行錯誤がつづいている。今回、いくつかの記号を活用しながら提示をする。「うん」「うーん」「へー」「あー」と、話の流れを途切れさせるには至らないけれど、合間合間にあらわれてくる相づちは、☆…で示す。《》内

には、笑い声や声の調子、状況説明といった補足情報をもりこんである。斜体の部分は笑いとかさなっての声をあらわす。また、聴き取れない部分については「＃＃＃」と記した。

（6）いま、テープやMDを聴き直しても、この部分はうたともとなえごともつかず、私の耳に浮かび上がって聞こえてくる。二〇〇一年八月二十三日、この言い回しについて「絹江さんはうたうって感じしますか」と私が問いかけ、星さんから「うん、うたでないけど、なんていうかねえ、そうだねえ」という応答がかえってきた。本稿で掲げる昔話集からの文字資料について、どのような声や身ぶりを伴って語られ、話されているのか、うかがえないところも多くかかえたままでの提示となる。耳にした音や声をどのように翻字するかという試行錯誤とともに、すでに文字化された資料から語り口を探るという作業についても、その可能性や限界を検討しながら、取り組みをつづけたい。

（7）事典類をひらくと、「発端は先に述べた豆蒔きの悪口を言う場合と、畑仕事の爺の動作をからかう場合とが多い。前者は主に東北に分布し、後者は西南日本を中心に分布している」（「かちかち山」の項、執筆者鳥越明子／『日本昔話事典』（稲田浩二・大島建彦・川端豊彦・福田晃・三原幸久編、弘文堂、一九七七年）や、「狸の婆汁」での狡猾な狸の悪口の話は、九州・四国では爺が鍬で田打ちをする動作をはやし、東北では爺が「一粒、千粒なあれや」という種子播きをはやす」（「かちかちやま」の項、執筆者久野俊彦／『日本民俗大辞典』（福田アジオ・新谷尚紀・湯川洋司・神田より子・中込睦子・渡邊欣雄編、吉川弘文館、一九九九年）といった記述にあたる。

（8）柳田國男は「かちかち山」（初出は「かちかち山考」として一九三六年二月『文鳥』第六輯に掲載、一九三八年十二月『昔話と文学』（創元社）に収録）において、「トリモチを石に塗って置いた」というくだりに「東西の一致」（『柳田國男全集 第九巻』所収『昔話と文学』筑摩書房、一九八八年、三三三頁）を見る。

（9）「わざ」ということばは、「言語態」からの取り組みや問いかけに刺激をうけて、使っている。「言語態というときの「態」について、ここにふれておく。一面に、状（＝情）態、形態（学）、生態（学）、姿態などと言われるときの態であって、すがた、しな（＝姿としての）、さま、かたち、ありよう、であるとともに、反面に、それらをささえる心の状態や身体の動きと働きとをみせる「わざ」（「わざわい」のように「わざ」がみかけの主体になるときもある）＝態度でもあって、その「態」が「言語」という「こと」とあわさって、言語態はことといい（＝言問い）、こたえ（＝ことあえ、「こと」をあわせる、の意）るところにはじまる、言語主体活動の一切にわたり、全面展開する」（藤井貞和「創意が踊る舞台の言語」、藤井貞和・エリス俊子編『創

発的言語態』（東京大学出版会、二〇〇一年）、四・五頁）と、ひろびろと提示される「態」を、口承文学の問いとしてどう響き合わせていけるのか、模索のさなかにいる。

（10）最近の研究として、廣田收「『宇治拾遺物語』の叙述と表現―第一一三話「博打子婿入事」をめぐって―」（同志社大学人文学会編『人文学』第一七五号、二〇〇四年三月）では、爺と狸とのやりとりを「言葉の争い」「言葉の応酬」（一一三頁）ととらえる。「言葉」なら「言葉」を口に出す、口を活用しての行為の部分に、本稿では重心をずらして、両者のやりとりにせまりたい。

（11）藤守の田遊びを前にしながら残した私のメモには「まわれ、と外から声かかる」と書いてある。新井恒易『農と田遊びの研究』によると、藤守の田遊び、「荒田」では「しずかにまわりながら一節を歌い、終わると急速にひとまわりして次節に移る、というようにして続け」（上巻、二二〇頁）とあり、舞台の外からかかる声にはふれられていない。「まわれ」と言われるまでもなく、速度は緩急をくり返すのかもしれないけれど、舞台の青年たちに向かってひと声かけ、円陣の動きをうながしうるということに目をとめておく。

（12）板橋区立郷土資料館 吉田政博編『田遊び―農耕文化と芸能の世界―』板橋区立郷土資料館、一九九七年、二十九頁。

（13）東京都板橋区教育委員会調査・編集『いたばしの田遊び』板橋の田遊び保存連合会（田中吉五郎・小泉重次郎）、一九七三年、十頁。

（14）新井恒易『農と田遊びの研究 上巻』明治書院、一九八一年、一二一頁。

（15）ムカシの狸たちもまた、手をのばし目をとめて、かまってくる。左に右にとぶらぶら揺れる「ちんちょう」に「囃子」をかけてくれたり（【3】）、畑をおこす爺に向かって「あっちのたんぽがプーラプラ、こっちのたんぽがプーラプラ、中のちんこがキョーロキョロ」と鳴いてみせる（滝沢松太郎さん「かちかち山」（群馬【44】））。また、高木史人「身体に刻みこみ＝刻みこまれる昔話」（『語りの世界7』語り手たちの会、一九八八年）では、「たとえば祖母の「カチカチ山」は次のような口吻だった」と、〈聴覚〉〈視覚〉〈触覚〉〈嗅覚〉を連動して、語り口や声の調子を思いおこしていくなかで、語り口はわからないながらも「狸はお爺さんのおちんちんをチョンチョンとつついていたずらした」（二十六頁）くだりが記される。

（16）小野寺節子「板橋の田遊び―宇宙空間の体現―」（板橋区立郷土資料館 吉田政博編『田遊び―農耕文化と芸能の世界―』板橋区立郷土資料館、一九九七年）では、「田うないが始まって、大稲本の太鼓に導かれた牛役が登場し、牛がよたよたし（ママ）とながら追い立てられて太鼓の回りを巡ると、「もいっかい（もう一回）もいっかい」と声がかか

る。人々の笑いとともに、拍手が沸く。草かきになると、役人の中から「どうもはえーな（速いな）」と一言出ると、「今　除草剤だからな」と他の声が上がった。ここでも笑いがこぼれる。また、五月女役の男児を抱きかかえるように太鼓の上に持ち上げるが、体格の良い子もいる。するとここでも、「初めに重い子からやれ」と声がかかる」（八十六頁）と、徳丸の田遊び当日のようすを記す。

◆昔話引用資料一覧

【1】有馬英子編『手無し娘―鹿児島の昔話―』一九七五年　桜楓社／七十八頁

【2】佐々木徳夫編『夢買い長者―宮城の昔話―』一九七二年　桜楓社／八十八-八十九頁

【3】荒木博之編『甑島の昔話』一九七〇年初版、一九七五年再版発行　三弥井書店／一〇〇頁

【4】三原幸久編『阿蘇山麓の口承説話　熊本県阿蘇郡阿蘇町・一の宮町・長陽村・上益城郡矢部町』二〇〇三年　関西外国語大学三原研究室／二十九頁

【5】本間紀久子報告「天童の昔話」、昔話研究懇話会編『昔話―研究と資料―　第五号』一九七六年　三弥井書店／二〇五頁

【6】嶋田忠一報告「池内スヱ媼の昔話―秋田県山本郡山本町森岳―」、昔話研究懇話会編『昔話―研究と資料―　第八号』一九七九年　三弥井書店／二四六頁

【7】大谷女子大学説話文学研究会編集発行『荒川町昔話集』一九八七年／二〇二頁

【8】野村純一責任編集／酒田昔話調査会採話『酒田の昔話』一九七六年　酒田市／五-六頁

【9】宮地武彦編『脊振山麓昔話集』一九七七年　岩崎美術社／三十頁

【10】【3】に同じ／一〇二頁

【11】柴口成浩・仙田実・山内靖子編『東瀬戸内の昔話』一九七五年　日本放送出版協会／一〇〇頁

【12】浜名志松・三原幸久・三宅忠明編『肥後の昔話』一九七七年　日本放送出版協会／一五二頁

【13】【3】に同じ／一〇七頁

【14】【3】に同じ／九十八頁

【15】【7】に同じ／二〇九頁

【16】【9】に同じ／一四三頁

【17】今村泰子編『羽後の昔話』一九七七年　日本放送出版協会／九十七頁

【18】民俗文学研究会編集発行『伝承文芸　第十一号　由利地方昔話集』一九七四年／七十八頁

【19】民俗文学研究会編集発行『伝承文芸　第六号　岩手県南昔話集』一九六八年／五十六頁

【20】野村敬子編『真室川の昔話　鮭の大助』一九八一年　桜楓社／一一一-一一二頁

【21】ざっと昔を聴く会編／野村典彦責任編集『石川郡のざっと昔―福島県石川郡昔話集―』一九九一年 國學院大学説話研究会／一一二頁
【22】大谷女子大学説話文学研究会編集発行『神林村昔話集』一九八六年／一四一頁
【23】【12】に同じ／四十八頁
【24】佐藤義則編『羽前小国昔話集』一九七四年 岩崎美術社／三十三頁
【25】野村敬子編『真室川昔話集』一九七七年 岩崎美術社／七十五頁
【26】山本明編『陸前伊具昔話集』一九八一年 岩崎美術社／一四一頁
【27】今村義孝編『秋田むがしこ』一九五九年 未来社／二四五頁
【28】佐賀民話の会編集発行『基山の民話』一九八六年／三十頁
【29】民俗文学研究会編集発行『伝承文芸 第十二号 仙北地方昔話集』一九七六年／三十八頁
【30】宮本正興・山中耕作編『対馬の昔話』一九七八年 日本放送出版協会／四十七頁
【31】【4】に同じ／三十一頁
【32】【8】に同じ／一―二頁
【33】野村純一・新田壽弘編『池田鉄恵媼昔話集』一九八三年 荻野書房／三十二―三十三頁
【34】【7】に同じ／二〇七頁
【35】【17】に同じ／一六七―一六八頁
【36】野村純一・畠山忠男編『話の三番叟―秋田の昔話―』一九七七年 桜楓社／七十二頁
【37】【18】に同じ／七十二頁
【38】【18】に同じ／七十七頁
【39】斎藤正編『津軽昔話集』一九七四年 岩崎美術社／十五頁
【40】京都女子大学説話文学研究会編『紀伊半島の昔話』一九七五年 日本放送出版協会／二二六―二二七頁
【41】國學院大學日本文學第二研究室内 野村純一・野村敬子編集発行『萩野才兵衛昔話集』一九七〇年／五十二頁
【42】【12】に同じ／一八〇頁
【43】佐々木徳夫編『遠野の昔話―笹焼燕四郎―』一九八九年 ぎょうせい／一四六頁
【44】柾谷明編『吾妻昔話集』一九七九年 岩崎美術社／一六二頁

（ふじひさ・まな／東京大学大学院）